



千葉市美術館ニュース「C'n」(シーン) 108号

vol. 108

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

ccma_jp ccma_jp

[編集・発行] 千葉市美術館 〒260-0013 千葉市中央区中央3-10-8 TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art 3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-0013, Japan <https://www.ccma-net.jp/>
[発行日] 2023年5月30日
[印刷] 株式会社 エイチケイ グラフィックス

三沢厚彦(Painting 2022-32)2022年
©Misawa Atsuhiko Courtesy of Nishimura Gallery

館長のつれづれコレクション案内 麒麟とキリンを重ねる意欲作-石井林響「王者の瑞」



石井林響「王者の瑞」

麻本着色 二曲一双 1918年
各234.8×220.6cm 千葉市美術館蔵

動物が描かれた絵は多数ありますが、この作品は中でも特異な一点です。向かって左側の一隻に描かれている動物は実在のキリンに似てはいるものの、体は黄色に暗褐色の斑点ではなく、灰白色に青の斑点があり、四肢や頭、尾を火焰状のものが取り巻いています。もう一隻に描かれているのは中国古代の高位の人物で、題名の「王者の瑞」から、聖帝が現れるときに聖獣である麒麟が現世に現れるという故事に取材したことがわかります。そうであれば描かれるべきは龍頭獅身、鱗があり、四肢の間から火焰を放つとされる霊獣・麒麟であるはずですが。麒麟の図像は中国古代に確立され、日本にも伝来していました。その姿はキリンビールの商標の

ような形です。なぜ林響は日本でキリンと呼ばれているジラフに似せて描いたのでしょうか。

その背景には明治以降、それまで実物を見たことがない動物たちが来日して、人々の動物イメージに揺らぎが生まれていたことがあるように思います。今ではテレビなどで世界中の動物を見ることができ、動物園でももとと日本に生息していない動物たちも実見できます。けれども、江戸時代まで、人々は日本に生息していない動物の姿を主に中国から伝わったイメージをもとにした絵や彫刻で思い描いていました。実物が来日する機会は稀少で、18世紀にベトナムから將軍吉宗に象が献上され、見世物になって大人気を博したといいますが、慣れない気候や食物のた

めか来日の翌年には息絶えてしまいました。

明治期には海外から来たサーカス団が象や虎などの芸を見せて人気を博し、その中のひとつで1886年にイタリアから来日したチャリネ曲馬団から1887年に上野動物園が虎を入手。1882年に開園した同園は1888年にアジアゾウ、95年にフタコブラクダ、98年にオランウータン、1900年にはオーストラリアからハリモグラ、ウオンバット、1902年にはライオン、ダチョウなど、次々に海外から動物を迎え入れて公開しました(註1)。1907年にはドイツからファンジ(雄)とグレー(雌)の2頭のキリンが購入され、大人気を博したといいますが、2頭を見た上野公園の職員高橋峯吉が「伝説にある麒麟とは似ても似つかぬおとなしそうな顔に、ちょっと意外な気がした」(註2)と記しており、当時の人々の戸惑いが窺えます。ちなみに、中国ではジラフを「長頸鹿」と呼んでおり、霊獣「麒麟」と重ねてはいないそうです(註3)。ファンジとグレーは日本の冬に耐えられず、翌年1月にグレーが、3月にファンジが亡くなってしまいます。

日本でジラフを麒麟と重ねて、その音で呼ぶようになったのは、明治初期の博物学者、田中芳男が動物図譜『動物訓蒙』(1875年)でジラフを「麒麟 キリン」として紹介して以降とされます(註4)。田中はフィラデルフィア万博(1876年)に際して渡米してジラフの剥製を購入して博物館の所蔵資料とし、1882年にはそれ

が上野動物園で展示されており、1907年から翌年までに見られたファンジとグレーの生きた姿とともに人々にキリンの姿を伝えました。石井林響は「王者の瑞」を描くため、博物館で剥製を写生したとされ、キリンと麒麟を重ね、西洋近代的自然科学に触れた近代日本にふさわしい説得力ある霊獣の姿を創り出そうとしたことが窺えます。

房総・土気の豪農の家に生まれ、千葉中学校在学中に洋画家堀江正章に画才を認められた林響(1884-1930)は18歳で「天風」と号し、日本絵画協会・日本美術院合同展に入選、23歳で第1回文展に「和気清磨」で入選するなど、早熟な画才を発揮して中央画壇での地歩を築きます。大正期には中国の故事に取材した作品を多く描いており、1918年の第12回文展に出品された「王者の瑞」もその一点ですが、この作品以後、それまで用いていた「天風」の号を「林響」に改め、中国明清の画風に学んで文人画風の画風に転じます。この作品は林響の画業の中でも転機となる重要な位置を占めています。

[館長 山梨絵美子]

註1 上野動物園の歴史については、同園の以下のサイトを参照。
<https://www.tokyo-zoo.net/zoo/ueno/history.html>

註2 高橋峯吉「動物たち五十年」実業之日本社、1957年

註3 湯城吉信「ジラフがキリンと呼ばれた理由:中国の場合、日本の場合(麒麟を巡る名物学 その一)」(平木康平教授退職記念号『人文学論集』26、2008年、大阪府立大学人文学会)。キリンの名称の確立経緯については本論考による。

註4 同上

Misawa 三沢 Atsuhiko 厚彦 ANIMALS Multi-Dimensions

——三沢厚彦さんは、動物を樟で彫り、油絵具で彩色する「ANIMALS (アニマルズ)」による展覧会を、これまで全国各地で開催してきました。今回の展覧会は千葉県で初の個展となり、関東の美術館では2018年に横須賀美術館で行われた「三沢厚彦 ANIMALS IN YOKOSUKA」以来、5年ぶりとなります。三沢さんにとって彫刻との出会いや、彫刻について意識されたのはいつ頃からでしょうか。

家族で奈良や京都のお寺に行った思い出が、やっぱりありますよね。その時に、奈良の仏像を見るのが、一つの行事になっていました。

もう一つは、小学校1年生の時に、粘土でつくって焼いてもらえる図画工作の授業があったのです。その時に、舌を出しているブルドッグをつくったのですよ。色も付けて、すごくいいものできたなと思っていたら、先生にすごく誉めてもらえて、こういうことが好きなのかなという意識がありましたよね。

小学校の卒業アルバムに、僕は「彫刻家になりたい」と書いたのです。やっぱり彫刻家になりたいと思っていたのですね。

——京都から東京に移られ、東京藝術大学と同大学院で彫刻を学ばれました。2000年より始められた「ANIMALS」は、大学時代に木彫をされていた三沢さんが、久しぶりに木を彫りたいと思われたことが始まりだったのでしょうか。

よく行く材木屋さんで、いろいろな木の切り落としの立方体がたくさん売っていたのです。その時に、動物の頭をまず彫ろうと思って、ドローイングに近い感覚で彫りながら、色を付けていきました。木彫は、学部の時や大学院の時もやっているのだけれども、

あつ木彫ってこんなに面白かったのだと思って、そこからだんだんと犬の形になったり、猫の形になったりしていきました。

「ANIMALS」にたどり着くまで、僕の中ではいろいろな変化がありました。動物の木彫という感じなのですが、誰でもわかるようなモチーフが良いなというのがあったのですよね。

——「ANIMALS」では、これまでたくさんの動物が作られてきました。三沢さんにとって、樟で動物を彫ることにどのような意義を感じていらっしゃいますか。

初めは作品の数が多くないので、展覧会をやるようになって、いろいろと気付いていきました。

等身大ということですが、本物の動物は見ないので、動物の「リアリズム」を追求しているのではないのです。実際の動物というのは、みんな知っているけれど、何となく人間の方から見て、動物の思いを察するぐらいで、ちょっと不可解なものだという感じがしています。その中でこの動物はこういうもの、ああいうものという人間の思いみたいなものが、増幅してくるわけですね。

だから、僕のつくっているものは、動物のリアリズムに触れていないことによって、見る人がいろいろな感想を持ってもらえるのかなという気がします。動物自体のリアリズムでもないし、キャラクターでもないというその領域って面白いと思うのですよね。

——近年、三沢さんは空想上の動物を精力的に制作されています。そのような現実には存在しない動物は、等身大で動物の姿を彫る「ANIMALS」において、どのようなきっかけで生まれたのでしょうか。

アーティストインタビュー

「三沢厚彦 ANIMALS / Multi-dimensions」の開催にあたり、三沢厚彦さんに今回の展覧会の概要や見どころ、これまでの彫刻の活動について、お話をうかがいました。

【話し手：三沢厚彦、聞き手・構成：学芸員 森啓輔】



三沢厚彦《Animal 2020-03》2020年 ©Misawa Atsuhiko Courtesy of Nishimura Gallery Photo by Misawa Atsuhiko

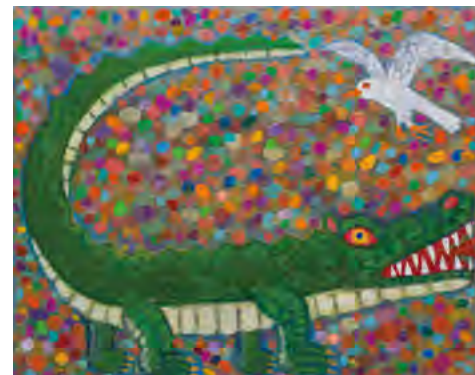
ペガサスやユニコーンをつくっていたのですけれども、僕の中ではその意味をあまり気付いていませんでした。ユニコーンを作った時は、北海道で見た観光用の馬がものすごく大きかったのですよ。かっこいいなと思ってつくっていたら、大きくなりすぎちゃってしっくりこない。どうしようかなと思って、角を簡単に作って載せてみたら、すごくしっくりきたのですよね。ひょっとしてユニコーンって、このサイズじゃないかなと。見たことないのですけれども、どうしてユニコーンだと成立したのかなと、そのことを考えることがすごく面白いなと思ったのです。

——今回の個展に向け、ライオンの頭や翼、蛇の尻尾を持つキメラが、二本足で立つ最新作に取り組まれています。三沢さんはキメラを制作されながら、今どのようなことを考えられていますか。

最近、キメラがつかれるようになった背景には、「ANIMALS」でやっていた「多様性」みたいなものが、テーマとして僕の中であったのかなと思っています。種類も生態系もあれだけ違う動物が、一つのボディの中に存在している状態がすごく大事で、そういうふうになんと生を持って生まれてきた存在自体が、すごく大切だと思ったのですよね。そういうものがあることによって、いろいろな世界を作っていく。だから、一つも欠けちゃダメなのですよね。そういう多様性の象徴が、キメラかなという感じがしています。

——最後に、展覧会を楽しみにされています。観る方々へのメッセージをお願いします。

千葉市美術館では、いろいろなプログラムや空間があって、一つの建物の中に入るといろいろな要素が全部美術に関わっていて、すごく興味深いです。僕の展覧会では、その中で「ANIMALS」を展開しながら、自分なりに千葉市美術館でしかできないことをやろうと考えています。どうか楽しみにしていただければと思っていますし、たくさんの人に会いに来てもらえれば嬉しいです。



三沢厚彦《Painting 2022-15》2022年 ©Misawa Atsuhiko Courtesy of Nishimura Gallery Photo by Okano Kei



三沢厚彦《Painting 2022-48》2022年 ©Misawa Atsuhiko Courtesy of Nishimura Gallery Photo by Okano Kei



三沢厚彦《Animal 2011-01》2011年 ©Misawa Atsuhiko Courtesy of Nishimura Gallery Photo by Uchida Yoshitaka



三沢厚彦《Animal 2016-01》2016年 ©Misawa Atsuhiko Courtesy of Nishimura Gallery



三沢厚彦《Animal 2018-01》2018年 ©Misawa Atsuhiko Courtesy of Nishimura Gallery Photo by Onuma Shoji

三沢厚彦 ANIMALS / Multi-dimensions

会期 2023年6月10日[土] - 9月10日[日]
会場 8・7階 企画展示室ほか
休室日 6月12日[月]、19日[月]、26日[月]、
7月3日[月]、10日[月]、18日[火]、8月7日[月]、
21日[月]、9月4日[月]

※第1月曜日は全館休館
詳細はホームページよりご覧ください





2023年4月17日(月)～7月2日(日) 「つくりかけラボ11 金田実生|線の王国」アーティストワークショップ

レポート 大人も子供も自分の線を描く、線の魅力と豊かさに触れる

2023年5月5日(金・祝)に、金田実生さんによるアーティストワークショップ「浮世絵の線を使って私の絵を描こう!」を開催しました。つくりかけラボとコレクションを掛け合わせた、新しいかたちのワークショップをレポートします。 [テキスト: 囑託学芸員 樽谷孝子]



はじめに参加者のみなさんに渡されたのは、なんとアイマスク。3色のクレヨンを選んだら、アイマスクをつけ、なにも見えない状態で線を描いていきます。



金田さんが、水をつけた紙の上に絵の具を乗せてぼかしたり、グラデーションを描いたり、何通りもある線の描き方をいろいろな画材を使ってデモンストレーション。



千葉市美術館が所蔵する月岡芳年《風俗三十二相 けむさう 享和年間内室之風俗》から、「煙の線」だけを抜き取って彫った版木(アダチ伝統木版画保存財団制作)で摺られた紙が用意されました。参加者のみなさんは、ここに自由に線を描いていきます。



自由に、思うがままに、線を描いていきます。困ったことがあると、金田さんがアドバイスをしてくださいました。自分で色を作る人や黒を巧みに使う人も、どんどん個性的な画面ができていきます。



できあがった作品を並べてお披露目会。一点一点見ながら、作者と金田さんのコメントを聞きました。最後は拍手で終了! 完成した作品は、現在、4階の通路に展示されています。

★参加者の言葉

——絵をかくことも、絵の道具にさわることも何十年もなかったもので、経験できてとてもよかったです。普段、鑑賞するばかりなので、自分が体験したり、他の人が描く姿を見られるのが楽しかったです。(60代)

——さいしょにもう線があって、それから自分の線をつけたのがおもしろかった。いろんなさくひんがあっておもしろかった。(8歳)

つくりかけラボ11 金田実生|線の王国

会期 2023年4月17日[月]～7月2日[日]

会場 4階 子どもアトリエ

観覧料 無料



次回予告/



2023年7月14日(金)～10月15日(日) 「つくりかけラボ12 三沢厚彦|コネクションズ 空洞をうめる」

アーティストインタビュー

[取材日: 2023年3月22日]

第12弾の「つくりかけラボ」は、彫刻家の三沢厚彦さんをお招きします。千葉市美術館では、6月10日から9月10日まで、三沢さんの個展「三沢厚彦 ANIMALS/Multi-dimensions」も開催します。企画展示室と連動させながら、三沢さんもその一人である「コネクションズ」*のメンバーと行われる「つくりかけラボ」のプロジェクトについて、お話をうかがいました。

——今回、三沢さんには個展と合わせて、つくりかけラボにも参加いただきます。つくりかけラボについて、どのようなお考えをお持ちですか。

つくりかけラボの性質が面白いですね。ふつうですと、つくり出したら最後は完成形を見せるのですが、つくりかけ、なんですよ。それは、言いかえれば永遠性があるということです。ずっと繋がって、ずっと動いていくという。僕自身も楽しみにしています。

——「空洞をうめる」をタイトルとされました。つくりかけラボでは、来場者が参加するワークショップやイベントも行われますが、どのようなところからこのテーマをお考えになりましたか。

以前から、地方都市のいろいろなところにある「空洞化」の問題が気になっていました。それは、経済や人口の空洞化かもしれませんが、文化にもいえるかもしれません。千葉市美術館に何回か訪れているうちに、美術館の活動自体が、その空洞化を埋める大切な文化発信の役割を担っていると思ったのです。その空洞というものを、つくりかけラボでいろいろな関係性を持ちながら考えたいと思っています。

——企画展では、会期中に三沢さんが滞在制作をされるスペースを会場に設け、「中庭部屋」と名付けられました。

「空洞」をテーマに考えていった時に、住宅をつくるには「中庭」から考えるという、千葉市美術館

を設計した大谷幸夫さんの言葉に行き着きました。中庭は人が住む場所でもないけれども、大谷さんはたぶんその重要性に気づかれていたのだというね。

——「中庭」が「空洞」とつながっているのですね。

中庭は、そこに季節感や自然など、人はいろいろなものを見ますよね。人が住む、住まないということと、人が住んでいる居住空間がメインになるかもしれませんが、中庭という大谷さんの考え方から、空洞という一つの場所を考えていきたいのです。だから、今回の企画展とつくりかけラボは、はたこう連動して考えていますね。

——「うめる」という言葉もポイントでしょうか。この言葉からも、つくりかけラボがどう変化していくか、いろいろなことが連想できそうです。

空洞も良いといえば良いのですよね。何も無い空間にどんどん入れていく楽しみもありますし、そういうものがなくて、何も無い空間があることによって、いろいろなものが行き来できる空間となります。「うめる」という言葉も「生まれる」という意味と、埋めていくという「埋める」のダブルミーニングで、ひらがなにしています。僕もその一人である「コネクションズ」のメンバーや、来場者の人たちと考えるのが、面白いかなと思っています。



三沢厚彦(みさわ・あつひこ)

1961年京都府生まれ。幼少期から京都や奈良の仏像に親しむ中で、彫刻の魅力に惹かれ、彫刻家を志す。高校、大学と彫刻科で学び、東京藝術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻を修了。小学生の頃からポピュラーミュージックにも親しみ、音楽に対する造詣も深い。2000年に動物の姿を等身大で彫った木彫「ANIMALS」シリーズの制作を開始。同年より西村画廊(東京)で個展開催。2007年から「三沢厚彦 ANIMALS+」展が平塚市美術館を皮切りに全国5会場を巡回。その後も現在まで各地の美術館で個展を多数開催。主な受賞歴に2001年第20回平柳田中賞受賞。2005年第15回タカシマヤ美術賞受賞。2019年第41回中原二郎賞受賞。現在、神奈川県在住。武蔵野美術大学造形学部彫刻学科特任教授。

*「コネクションズ」: 三沢さんがともに活動しているアートコレクティブ。2022年、小田原三の丸ホールでの展示を機にスタート。つくりかけラボでも複数のアーティストの参加を予定。

つくりかけラボ12 三沢厚彦|コネクションズ 空洞をうめる

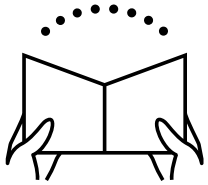
会期 2023年7月14日[金]～10月15日[日]

会場 4階 子どもアトリエ

観覧料 無料



三沢厚彦《Cat 2010-04》2010年 ©Misawa Atsuhiko Courtesy of Nishimura Gallery



びじゅつライブラリーおすすめ本紹介コーナー 本をみる、美術をよむ vol.8

あたらしい本がやってきた!

びじゅつライブラリーに、あたらしい本が加まりました。絵本から文芸までジャンルはさまざま。今回は、そのなかからおすすめの6冊をご紹介します。

清水裕貴『海は地下室に眠る』



当館でも作品を所蔵、プロジェクトやワークショップも開催している、写真家・作家の清水裕貴さんの新刊。なんと主人公は千葉市美術館の学芸員! とある謎の絵画をきっかけに、過去と現在が交差する美しい物語です。

エルンスト・H・ゴンブリッチ『美術の物語』



美術史を学ぶうえでおなじみの基礎文献。「世界一売れている美術史の本」なのだそう。分厚い一冊ですが、読ませるテキストと豊富な図版が飽きません。ぜひびじゅつライブラリーに通って読み込んでみてください!

斉藤倫作／植田真絵『えのないえほん』



「びじゅつライブラリー」とは、千葉市美術館4階にある図書室です。美術にまつわる親しみやすい本を、約4,500冊配架しています。ぜひふらっと遊びにきてください!

この本は、「あるところにみにくいけものがいました」という一文で始まります。なぜこのようなタイトルがつけられているのか。工夫あふれる装丁もあいまって、物語の世界へと引き込まれます。

リウ・スーユエン文／リン・シャオペイ絵『きょうりゅうバスでとしょかんへ』



台湾の作家による絵本。3人の主人公は、恐竜の背中に乗って図書館へ向かいます。けれど、恐竜は、図書館に入るには少し大きすぎるみたい……。本を読む喜びが、いきいきと伝わってくる一冊です。

荒井良二『ぼくのキュートナ』



「キュートでかわいいぼくのキュートナへ」。15通の手紙と、「きみ」を励ます言葉と絵たち。荒井さんの独特の言葉づかいに、不思議と背中を押されます。10月4日から始まる荒井良二展もお楽しみに!

きくちちき『ともだちのいろ』



主人公の「くろちゃん」はもふもふの黒い犬。色とりどりの友だちたちが、みんな揃って「くろちゃんなにいろすき?」と聞くけれど、ひとつには決められません! BIB2023 日本代表作品にも選出。

所蔵作品検索ページを公開しました!

千葉市美術館のホームページから、当館の所蔵作品を検索できます。まだ数に限りはありますが、作品の画像が大きくご覧いただけるのが特徴です。当館が誇る豊かなコレクションに触れたり、調査や研究に活用したり、展示鑑賞の相伴に、さまざまな用途でご利用ください。



キーワード検索や詳細検索で、所蔵作品の検索ができます。



絵入版本の全ページの画像が公開されているものもあります。



「高精細ギャラリー」では、特別な撮影を行った作品を順次ご紹介していきます。表現の細部にまで迫る画像をお楽しみください。

アクセスはこちらから!
「千葉市美術館 所蔵作品検索」
<https://www.ccma-net.jp/collection/>

※千葉市美術館所蔵作品検索で公開される内容は、すべての作品情報ではなく、調査研究の進行にしたいが随時更新・追加を行っています。

※一部をのぞき寄託作品は公開していません。

※著作権の保護期間にある作品等につきましては作品画像を公開していません。

公衆 Wi-Fi のお知らせ



美術館内に無料でお使いいただけるフリー Wi-Fi スポットが設置されました。お使いいただけるのは8・7階企画展示室、5階常設展示室・ワークショップルーム、4階つくりかけラボ。出品リストをダウンロードしたり、詳しい作品情報をウェブ上で閲覧したり。接続方法など詳しくはご来館時にお確かめください。

新スタッフをご紹介します!

千葉市美術館の学芸課に、新しい仲間が加わりました! ちょっとしたプロフィールもご紹介。これからどうぞよろしくお願いいたします!

- ①出身地 ②専門 ③これまで担当した展覧会や企画など ④千葉市美術館の魅力はここ! ⑤千葉市美術館のコレクションでお気に入りの1点 ⑥これから千葉市美術館でやりたいこと



うえだ みさと
上田美里

- ①群馬県前橋市
②つくりもの(ツールなどのデザイン)、ワークショップ運営
③常設展や各展覧会鑑賞ツールデザイン、コレクション展関連ワークショップ企画など
④スタッフもボランティアさんも明るく尊敬できる人ばかり! 展示が素敵なのはもちろん、楽しいワークショップもたくさん開催しています。
⑤ヘレン・ハイド《お化け灯籠》1906年: おばけの表情がかわいく、タイトルとのギャップがたまらない作品です。
⑥作品に親しみをもってもらえるようなツールを作成したり、鑑賞に絡めたワークショップやイベントの企画や実施をしていきたいです。

やましたあやか
山下彩華

- ①愛媛県松山市
②表象文化論(近現代西洋美術)
③「小さなデザイン 駒形克己展」、「プラチスラバ世界絵本原画展」、「川島理一郎展 自然から得たいの生命の律動」(いずれも足利市立美術館)など
④企画展、常設展、つくらボ、図書室など、さまざまなコンテンツによって、いろんな美術の楽しみ方ができるところだと思います。
⑤若林奮《鮭の振動尺 I-A》1978年: 常設展示室でこの作品を見たとき、なぜかとても惹きつけられて、家に帰ったあとも思い出すくらい印象に残りました。
⑥美術館の中のおちこちに、来館者のみなさんが新たな感性や価値観に出会える瞬間をつくっていききたいです。

そめや みほ
染谷美穂

- ①栃木県小山市
②浮世絵
③「ジャポニスムー世界を魅了した浮世絵」、常設展(千葉市美術館)、「黄金期の浮世絵師たち〜清長、歌麿、写楽に豊国も〜」、「新春浮世絵展」、「世界の大大北斎展」、「浮世絵にみる“時”の移り変わりー江戸から東京へー」(いずれも監修、川崎・砂子の里資料館より)など
④様々な分野の展示がみられるところ
⑤鳥文斎栄之《朝顔美人図》1795年: 栄之の一番美しい絵画作品のひとつです!
⑥作品の魅力を最大限に引き出す展示と空間構成を考えたい。専門である鳥文斎栄之の展覧会の準備を頑張ります。